

莫妄想

問 見性成佛と云ふが、本來無一物に何の性を見る事をや、

答 性は無形無體なり、此性を見る時は、佛衆生の隔なく、無心無念の眞佛に合ふ、此所を差して見性と云ふなり、

問 無心無念に合ふて後は如何、

答 冬は寒し夏は暑し、

問 無心無念の所に於て、如何ぞ寒暑ありや、

答 寒暑共に無心無念なり、寒なれば寒し、暑なれば暑し、

問 暑ければ寒ならん事を思ふなり、無心なる者か何として思ふぞ、

答 知らず、

問 知らずとならば賢愚共に知らず、然るを知るを賢とし、知らざるを愚と云ふは如何、

答 知らぬは賢も愚も同じ、然るを知ぬ事を色々と妄に私案を以て分別する故、此を愚と云ふ、又賢は知れぬと云ふ事を知て、妄なる分別せず、唯當機たる所とするを賢と云ふ、

問 成程妄なる分別は悪るし、無心の本體なる所を以て見る時は、妄に無しとても分別すれば私心なり、私心とて無分別にて何をかする、飢て食を思ひ、渴して飲を思ふも分別に非ずや、

答 渴して飲を思ふを分別と見るは非なり、分別と云ふは、未だ飢ざる先に、若し飢れたらば如何せんと分別するを分別と云ふ、飢れて食を思ふは分別に非ず、此を體用にて云へば、飢れたるは見ずして體なり、食するは用なり、飢れたる時食するは飢れたる時の用なり、分別して食を思ふに非ず、問 事に當て思ふは分別に非ずとの譯聞れたり、然らば聖人無事の時は枯木死灰の如くなる者に候や、

答 否然らず、天の流行息む時なし、道の體も息まず、聖人の心も息まず、

是を仁と云ふ、天の道にては、春は花咲き秋は枯る、人道にては、子として親を慕ひ、親としては子を思ふ、是を息ますと云ふ、

問 其息まざるものは、天と人と同じか別か、

答 同じなり、

問 天に煩ひなし、人には病ざる者に因て煩ふは如何、

答 天にも憂樂あり、春は樂み秋は憂ふ、然れども樂みても樂みを知らず、憂ひても憂を知らず、夫れ故樂みを求る事なく、憂とても避る心なし、故に憂樂を常として怠らず、人は憂を厭ひ樂みを求む、爰に依て煩ひとなる、

問 然らば憂樂を知らざるが善く候や、

答 思はざるを善とするに非ず、善を見て喜び、惡を見て惡む、是れ私しに非ず、

問 其好惡するか分別に非ずや、

答 分別に非ず、善を好むは性善なるが故なり、惡を惡むも性善なるが故なり、

り、前に云ふ如く體用なり、好惡するは性の用なり、

問 體用一なり、用に好惡あれば、體にも好惡あり、無形無體の性何とて好惡するや、

答 性は無形無體なり、體用と云ふは、體と云ふ名あれば又性の用あり、性の處に於ては好惡の煩ひなし、

問 好惡なくんば、前に云ふ如く、枯木死灰なる者に候哉、

答 左に非ず、好惡なしと云ふは、善と知て善とも思はず、惡と知て惡めども惡に心なし、譬へば火に入てあつからず、水に入て溺れざるが如し、是を煩ひなしと云ふ、

問 溺れずあつからざる物は如何なる物にて候や、

答 夫を不可得と云ふ、

問 不可得とは得へからずと云ふ事にては無さや、得られぬ事なれば得る事は有まじ、然るに古語に道は得ること有りとは如何、

答 不可得とは成程得られぬと云ふことなれ共、得られぬとばかりに心得ば不可得に非ず、不可得と云ふは、昨日も不可得、今日も不可得、明日も不可得にして、得るも得ざるも不可得なり、

問 得ざるは不可得なり、然るに得るを不可得とは如何、

答 得とは何を得たるぞ、

曰 得とは道を得なり、又何にても手に入たる事は得と云ふに非ずや、

答 道を道て其道を得とせば得に非ず、如何となれば道の體は暫くも住するものに非ず、又何にても手に入たるを得と謂ふも、其得たる物或は増し或は減す、然らば得も不可得に非ずや、

問 然らば不可得を知り得ば萬事不可得に成候哉、

答 否、不可得に於て是を不可得として止る事なし、前に云ふ如く、得も得ざるも不可得なり、不可得には始もなく終もなし、念ふ毎に不可得にして怠ることなし、是を取り得たる人を悟道と云ふ、

問 不可得の所は、得られざる故不可得なり、然るに取り得らるゝ物に候や、

答 取得と云は見聞覚知の上に於て皆不可得に居るを云ふ、

問 其不可得の用は如何やうに行ふ事に候や、

答 行住坐臥皆用なり、

問 我云ふ處は不可得にして、其不可得なるより不可得を行ふ事を云ふ、

答 我云ふ處も不可得の用を云ふ、汝不可得を行ふと思へば、行住坐臥不可得の用也、豈不可得を行ふと云事かあらん、

問 古語に三尺の童子も知ること安し、八十の翁も行ふ事難しと云ふ、然らば知る處を行ふ事に非ずや、

答 行ふ事難しとは、知て夫に成らざれば行はれず、故に行ひ難し、舜は仁義に由て行ふ、仁義を行ふに非ずと孟子も給ふ、

問 明哲人作用本分に合ふべし、中人以下の者は志有ても行ふ事は一生能はざる事に候や、

答 左に非ず、本分に未だ至らざれば、解らざる處が主と成れば行はるゝと云ふものなり、

問 不可得が主と成て、後貴き事を云ふ時は、如何なる者にて候や、貴き事なくては、古人と云へ共精心を盡すまじ、

答 其處を得ば貴きを求める事もなく、賤きを惡む事もなし、富貴貧賤に迷はぬを貴しとす、

問 其所を得ば富貴に勝りたる者に候や、

答 富貴に勝りたるを見れば、勝劣を免れず、不可得の所が主となれば、富貴貧賤を忘るゝなり、爰を取て貴しとす、然も自ら貴しとも思はず、

問 我に貴き事を知らざるに、釋尊は何として唯我獨尊との給ふぞや、

答 釋尊の語は我程尊き物はなしと慢じ給ふ事にてはなし、人は其身其儘にて萬徳圓滿の者なり、其満足したる身を知らば、天上天下唯我獨尊なり、豈釋迦のみの事にあらんや、

問 此身此儘にて満足したる譯は如何、

答 先づ此身自在なることを思ふべし、目に見、耳に聞き、鼻に嗅ぎ、口に言ひ、夫のみならず目に見て、其音を聞ては其形を知り、香を嗅では味ひを知り、口に入れて身を養ひ、言語を以て自由を爲し、手に持ち足にて行て自在なる、是れ満足に非ずや、

(七珍)は七寶なり「さし草」に註せり

問 一身の動作する事は人に限らず、鳥獸も同じ、目に見、耳に聞き、足の歩行するを以て、萬徳圓滿杯と靈名を付る程の事はなし、尊きと云ふからは七珍萬寶を得たる如くなる心地ある事にては候はずや、

答 皆人器物の財を寶とする欲心より、此身の有り難き事を知らず、目に見、口に言ひ、手に持ち、足に行く事を細かに熟得して見るべし、眼耳鼻より手足に至る迄、斯の如く自由なる事は、目に見ると謂ふも目に見る所以なし、口に言ふと謂ふも口に言ふ所以なし、又足にて行けども足の歩行する所以もなし、然るに斯の如く自在なるは萬徳に非ずや、此妙用を知らずし

て、外に妙を見んと思ふ迷心より、此身の有り難き事を知らず、此身の大切なる事を避く譬へて云は、大欲心なる者有て、利欲の爲めに禽獸と云はれても厭はず財寶を好む者あり、箇程大欲の者にてても、將に大黄金百枚を與ん、今命を取んと云は、其金を喜び命を惜まず死すべきや、如何なる者にてても勇能く死ぬる事なし、然らば此身程大切なる物はなし、然るに此身の外に寶ありと思ふは皆欲心なり、古より忠孝の人、君の爲め、親の爲めまたは道の爲め、或は義の爲めに死を輕じて身を棄るは、全く身を惜むが故なり、是を安く棄ると見るは非なるべし、

問 眼耳鼻より手足の自由なるは、唯自由なる事に候や、亦自由とする所以の者ありや、如何、

答 有り、

問 如何なる者に候や、

答 言ひ難し、

問 言ひ難しとは如何、

答 夫を知ても是と指して形容する物なき故なり、

問 道は目前に明かなり、然るに形容なしとは如何、

答 目前に明かなれども知り難し、

問 道に道なし、自性と謂ふも是が自性と云ふべき物なし、また其名を謂ふも其形なし、然れども音を聞けば鐘と知り、太鼓と知り、花を見れば花が即ち己、音を聞けば音が即ち己なれば、目前に顯れ有るに非ずや、然るを何ぞ物有りげに知り難し云ひ難し却と勿體を付るは如何、

答 全く勿體を付るに非ず、我も一旦は汝が云へる如くに、目前に顯れ有ると心安く云へり、先づ汝に問ん、云ひ難しと云ふ事は如何なる處を云ふや、

曰 云ひ難しとは、知りは知つても、知りたる所は言句に能はざる所なり、

答 知りたる所は如何様に知り候や、

曰 聲も臭も無く、無念無心の處なり、

答 然らば自性は無心無念なり、其無心なる者が何とて物を云ひ、物と思ひ候や、

曰 夫を妙と云ふ、

答 然らば其處を妙に預たるに候や、

曰 否、妙に妙なし、妙破りて矢張妙なり、

答 妙と云ふより外は無さや、如何、

曰 黙する而已なり、

答 汝が至極は知りたり、無に止れりと見ゆたり、

曰 然らば汝が云ひ難しとは如何、

答 道は目前顯れ有ることは汝が云ふ如くなり、然れども云ひ難きは、物の音を聞けば、是聞く者何ぞと云ふ時、其音がすると直ちに聞くなり、鳴ると聞くど、彼が先とも是が後とも分らず、其分別無き處に於て、聞き知る者あり、是を得んとすれ共不可得なり不可得とは鳴ると聞くとの所に於て端

的を見る事なり、其端的を見ると謂ふも電光石火の如くにして、閃と鳴る、其鳴でハツと思ふ中にも早や無し、無しと云へば、無しと思ふ中に、無しと云ふものも早や無し、唯闕クヱツと鳴る成にして、聞得んとする間に移り行くものなり、斯の如く早き物なる故に、知らず共云ひ難しとも云ふなり、爰を以て不可得なり、形無き物故云はれず得られずと云ふには非ず、然らば妙なるもの故妙と云ふ妙に非ず、得られぬ程のものが斯の如く萬物に渡り斯の如く行はるゝ所を名付けて妙と云ふ、爰に於て道の體を見るべし、孔子水を示し玉ふも、道の體の見易きは川の流に如くはなし、暫時も止まらず流れ行きて無くなるかと云へば、繼續て終に絶えず、萬物皆斯の如し、天地萬物同根一體是なり、人は是を知る故に天地の靈なり、
問 自性を得んとする時見聞に付て、是れ何者ぞと尋ねて、夫を知る事なりと古へより云へり、何者ぞと尋ねれば、何ぞに當る事にて候や、
答 何者として形ある者を見る事に非ず、

問 其形も無きに、何者ぞと尋ねて、何を知る事に候や、

答 何者を知れば、其所は我も無し、人も無し、元來萬物なし、

問 然らば空にて候や、

答 空と云へば、空見とて佛も是を戒め玉ふ、

問 空と名付けずして外に付くる名は有るまじ、空に名を付けて面目とも、

自性とも、佛とも、神とも、様々に靈名を付くるものに非ずや、

答 空と云ふて濟むなれば、外に名を付くる事はいらす、

問 汝今も云ふ、我もなし人もなしと、然らば何もなし、其無一物なる所に、

法性とも、面目とも、明德とも、色々の名を呼ぶは如何、

答 無しと云へば、有に對する無と汝は思ふ故、空見となる、無とは言句を

離れたる者、故に無と云ふなり、此の無に名けて靈名を呼ぶなり、

問 其無と云ふは、如何なる徳の具りたる物にて、靈名を付けたるや、

答 人生れて世に住めば、其身に七情具足して、喜怒哀樂愛惡欲に迷ひ苦しむ

なり、然るに自性と云ふものは不生不滅にして、七情の苦みを離れたる者なり、天地の間に何物か不滅なるはなし、水に溺れ火に入ても、不滅の物は是のみ、然れば貴き物は此外に無し、故に諸道共に其道に依て靈名を付けて呼ぶなり、

問 汝が云ふ如くなれば、是れ程貴き物はあるまじ、然るに悟道したる者にも、世俗の事に著して、離れ兼る者あるは如何、

答 一旦見付けても取得る事なければ我物には成らず、故に貴き物と知りながら調法に成らざるなり、

問 取得るとは如何なる事に候や、

答 行住座臥忘れざるやうにする事なり、其所を知り得ば、行住座臥皆性の働きにして、私事は毛筋程もなし、人々本心なき者なし、是を別に得るものにてはなけれ共、本心と私心と分るゝ所を知りたるを得とは云んや、

問 取得て聖人にも至れば、私し事は有るまじ、未だ至得の所に至らざるは、

過は免れ難し、既に顔回ハ亞聖なり、然れ共三月仁に違はずと有り、然るに取得たるとして、私無しとは云れまじ、

答 成程汝が云へる如く、行住座臥皆性に合ふと云ふは、聖人にあらざれば及ばず、我云ふ所は合ふと云ふ事には非ず、性の働きたれば私心は用ゐざる故、私し無しとは云へり、夫を譬へて云へば、近世大石内藏助殿の事を以て見るべし、一旦君に身を任ねて、君の存念を慮りて、是を嗜さんとするのみ、全く敵を伐んと謀るのみに非ず、大石殿の心に於て敵と思ふ事は無し、唯亡君を思ふのみ、是を以て謀るを見よ、我知巧を振舞ふ事なし、京都に於て様々の不行跡を行ひ、一旦は連中共心を隔る程に懈怠あり、尤是は謀畧とは言ひ乍ら君に命を任ねたる處よりするとなれば、譬へ腰拔と云れて死ぬとも、大石殿の心に於て耻ることなし、修行も斯の如し、道に志ある者は、道に身を任ぬる事より他はなし、道に任ねて他事なくば、聖に至らずと謂へども、今日成す所は道の用なり、私し事はなし、中庸に性に率

ふと道と云ふと説き玉ふ、性に率ふより道は無し、性は形も影も無きもの也、夫に率ふて道と成るは如何と見よ、水の性は舟に付き、火は乾くに付き、子は親に付き、臣は君に付き、妻は夫に付き、弟は兄に付き、愚は賢に付き、下は上に付き、又親は子と思ふ、君は臣と思ふ、夫は妻と思ふ、兄は弟と思ふ、賢は愚と思ふ、上は下と思ふ、是れ分別せずして斯の如し、形も影も無きものに率ひぬれば理に違ふ事なし、故に道と成る、然るを知らず、道に任ぬる事なくして、たとへ聖人の如く行ふと謂ふとも私し事なり、問 性を保つに怠らず忘れず、能くすれば、妄念は少しも起ると無きや如何、答 念の起らぬと云ふ事はなし、天地あれば陰陽あり、陰陽萬物を生ず、人此身あれば念を生ず、天地の間に萬物生ずるが如く、無益なりとて生せぬやうには成らず、人も斯の如し、然らば念何程起るとて、心の障りとは成らず、問 念起る故心の障りとなるものなり、然るに障りとならずとは如何、答 念に障らるゝと云ふは放心なる故なり、放心さへせねば、念の起るに付

鳳仙乙堂和尚著 西有穆山老師 權田雷斧僧正 校訂

正法眼藏續註講義

新編和製木版 正價金壹圓七拾五錢
大本全五冊 郵税金貳拾貳錢

正法眼藏は曹洞の眼目、宗門の綱要也、曹洞の宗趣を知らんと欲せば、必ず先づ正法眼藏に通せざるべからず、而して正法眼藏を解するの正眼を具せんと欲せば必ず本書を取て之を讀まざるべからず、曹洞宗の中古、退藏桂師あり知見卓絶大に宗風を振ふ而も其唱ふる所人を謬ること多く其著正法眼藏辨註の如きは最も高祖の宗に違ふこと少しと爲さず茲に於て當時の鴻德乙堂和尚其の後人を誤らんことを恐れて本書を著述せらる其見解高邁、桂師をして色なからしむるものあり這回穆山雷斧二老師の校閱を経て之を梓に上すに至れり洞門の諸士請ふ必ず一本を座右に備へられんことを

京都市木屋町二條

各宗教書籍御經過去帖 佛畫肖像畫和漢洋圖書 廉價賣捌所 貝葉書院

一切藏經

卷數六千九百卅卷
冊數二千九十四冊
帙數二百七十五帙

映入全部正價金四百五拾圓
十卷ニ付金七拾五錢
外ニ金八圓假箱代金四圓荷造代

但一切經中何ノニテモ端拔可致候

一切經目錄

和裝大本全二冊映入 正價金五拾錢 郵送費拾八錢

大般若經六百卷帙入全部

極上等紺紙金泥外題正價金百五圓
並上等白紙外題正價金九拾圓
外ニ假箱荷造代金貳圓貳拾錢

但一卷ニ付極上等金貳拾錢並上等金拾七錢五厘○無帙全部ニ付各參圓引
同全部裏打金貳拾五圓増○同特別上等仕立天地金中金襴表紙裂帙入金五拾圓増

大般若經六百卷帙入全部

極上等紺紙金泥外題減價金九拾圓
並上等白紙外題減價金八拾圓

但無帙及裏打上仕立假箱荷造代金共銀眼版ニ同シ

本經ハ字體寸法卷摺仕立等都而比較山版ト同様ニシテ只相違ノ點ハ眞讀ニ目ノ草臥ナル様無野ニ致シ有之完全無缺ノモノニテ紙質ハ極厚口字和島製仙華ノ上等ヲ用ヒ印刷鮮明製本入念ニシテ今般出版候ニ付廣告ノ爲メ當分右ノ大減價ヲ以テ貴需ニ應ス

右版元發賣所

一切經印房

京都市木屋町通二條下ル
（御注文御照會共一切經大般若經ニ限り一切經印房宛○其他は都而貝葉書院宛ニ願上候）

宗禪

「禪宗」を初めて發刊したるは日清の交戦方に酣に全國の人心が戦事の情報に傾注したるの時なりき而して日清の交戦は端なく士氣の奮昂を來し士氣の奮昂は又禪學の勃興を促すに至れり是に於て「禪宗」は願る世人が禪に於ける渴望心を満足せしめ入道の便乘を爲したるは吾人の自ら深く信じて疑はざる所而して本誌の需用は日に益々多きを加へ今や五千の讀者を有するに至れり是を以て吾人は此多數なる讀者の希望に副はんが爲めに來る二月より大に紙面を改善し滿腔の熱誠を揮て事に茲に従ひ以て本誌の價值を高からしめ眞に悟道の良師友たらしめんと欲す

毎月一回(五日)發行◎定價(郵税共)壹部金六錢◎半ヶ年前金參拾四錢◎一ヶ年前金六拾六錢◎爲替振込は丸太町郵便受取所の事

發行所 京都南禪寺内 大取次所 京都木屋町二條 貝葉書院 禪定窟

法律學士手塚太郎君法學士吉原三郎君法學士田代律雄君高等中學校教授薩埵正邦君合述
刑事訴訟法講義 洋裝假綴全二冊千八百餘頁減價金七拾錢郵稅貳拾錢

附錄刑事訴訟法異同辨 金文字入願る美本全二冊減價金九拾錢郵稅貳拾四錢
 日本法學博士佛國法律博士宮井政幸君法學士手塚太郎君合述
法學通論 洋裝總ノロニス表紙金文字入 願る美本全一冊六百七十餘頁 減價金七拾錢 郵送費拾錢

高等中學校教授薩埵正邦君合述
刑法原理講義 洋裝假綴全一冊 六百二十餘頁 減價金參拾錢 郵送費八錢

法律學士加太邦憲君序調法學士山崎惠純君合述
刑事證據論 洋裝假綴全一冊 百七十餘頁 減價金拾錢 郵送費四錢

高等中學校教授薩埵正邦君合述
帝國財產編物講義 洋裝假綴全一冊 七百四十餘頁 減價金五拾錢 郵送費八錢

日本法學博士佛國法律博士宮井政幸君合述
損害賠償法原理 洋裝假綴全一冊 百五十餘頁 減價金拾錢 郵送費貳錢

●民法字解 洋裝假綴全一冊 百頁餘 減價金七錢 郵送費貳錢
 ●商法字解 洋裝假綴全一冊 八十餘頁 減價金五錢 郵送費貳錢
 ●民事訴訟法字解 洋裝假綴全一冊 八十餘頁 減價金五錢 郵送費貳錢
 ●農業經營法講義 洋裝假綴全一冊 四百七十餘頁 減價金四拾錢 郵送費六錢



